

ウラーンムチル芸術歌舞団の文革期と回復期における上演作品 —中国内モンゴル自治区赤峰市オンニュート旗の事例から—

T.アルタンバガナ

1. はじめに

本稿の目的は、内モンゴル自治区におけるウラーンムチル¹⁾ 芸術歌舞団の実態を探り、文革期と回復期における上演作品の特徴を明らかにすることである。

ウラーンムチル (*Ulayan möcir*) とはモンゴル語で、ウラーンは赤い、ムチルは枝²⁾ で、ウラーンムチルで「赤い枝」³⁾ を意味する。赤色はモンゴル語で革命を象徴する。漢語では「紅色文化工作隊」という。紅色は革命を象徴し、文化工作隊とは文化の活動を行う団体を指す。ウラーンムチルはまた、「烏蘭牧騎 (*wu lan mu qi*)」とも表記する。烏蘭はウラーンの音訳であるのに対して、牧騎は「ムチル」の音を表すと同時に、「牧畜民」と「騎馬」の意味も含む。馬に乗って社会主義を实践する牧畜民というのが「烏蘭牧騎」の字義になろう。さらにウラーンムチルは馬や馬車、或いは徒歩で、少人数で行動する性質から「社会主義文芸軽騎兵」とも呼ばれている (シンジルト 2010 : 185)。

ウラーンムチルは内モンゴル自治区の旗・県における芸術歌舞団体である。中国には5つの自治区があるが、内モンゴル自治区での行政区画の名称は図1に示した通りである。モンゴル語では盟をアイマク (*aimag*)、旗をホショー (*qoshiyu*)、郷をソム (*sumu*)、村をガチャ (*yača*) と表記する。このモンゴル語表記⁴⁾ は実際にも使われているが、ここでは便宜的に漢字 (中国語) 表記を用いる。

ウラーンムチルは、政府政策宣伝の担い手でありながら、文化教育活動を行う役割を果たしている。ここでいう政府政策とは、中国の国家政策のことを指す。内モンゴル自治区のレベルにおいては、内モンゴル自治区直

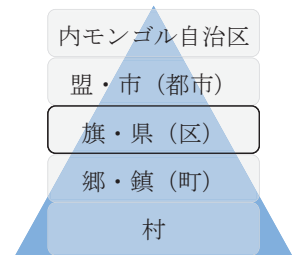


図1 内モンゴル自治区の行政区画図 (筆者作成)

¹⁾ モンゴルの「ウラーン」(赤い) は、人によっては「オラーン」、「ウラーン」などと表記されることもある。先行研究では、ウラーンムチルを「オラーンムチル」や「ウランムチ」と表記している。ウランムチは中国語の音読みである。本稿ではオラーンムチルや、ウランムチに対してウラーンムチルを使うようにした。ただし、先行研究を引用する場合は原文通り「オラーンムチル」や「ウランムチ」と表記し、オリジナルの意味を保持することにした。また、「赤い」と「紅い」については、日本語訳と借用語として使うときは「赤い」を使い、オリジナルの漢字を使う場合は「紅」を用いる。

²⁾ ムチルについて漢語訳では新芽と表記されてきた (内モンゴル自治区文化庁編 1997 : 80)。しかし、これは誤訳である。

³⁾ これは毛澤東の『文芸講話』(1942) にもとづく。毛澤東はこの講話において、中国のプロレタリア革命事業を「大樹」と例え、文芸・文化工作はその中の一つの「小枝葉」としてとした (内モンゴル自治区文化庁編 1997 : 80)。

⁴⁾ 本稿では、必要なモンゴル語の表記はモンゴル文字のラテン文字転写で表現する。

属ウラーンムチルを含むモンゴル青年合唱団、京劇団などモンゴル族⁵⁾や漢族を中心に少なくとも9つの歌舞団⁶⁾があるが、これに対して旗・県のレベルではウラーンムチル以外のほかの国立芸術歌舞団体はほとんど存在しない。1980年代まで、ウラーンムチルは内モンゴル自治区の首府フフホト市以外のいくつかの都市にもおかれていたが、のちに都市の拡大や人口の増加によりウラーンムチルは民族歌舞劇院に、或いは盟・市歌舞団に変更され、その規模が大きくなっていった。

ウラーンムチルは、ソ連やモンゴル人民共和国、中華民国時代に創られた文化施設の影響を受けている。ソ連では、1920～1930年代に政治と文化教育を行うため、基層機関・工場・住宅地・団地内に農村文化館や紅角(赤いコーナー)⁷⁾という文化や教育に関する施設が設けられていた(王編2000)。モンゴル人民共和国にも、モンゴル人民革命党のイデオロギーを普及するため「Ulaan ger」(ウラーンゲル)が設けていた。ウラーンゲルは「赤いゲル」というモンゴル語であり、モンゴル・ゲルにおける文化施設である(Marsh2006)。当時、中国の共産党軍にも以上のような施設として文工団が設置されていた(松浦2000)。内モンゴル自治区では、ウラーンムチルは文化館をもとに創立された。しかし、文化館は旗の中心町にあり、固定された場所なので移動できない。ウラーンムチルは、小規模で移動性があり、かつ総合性の歌舞団として活躍した(T.アルタン2020)。ウラーンムチルの隊員⁸⁾は創立当時、約10人であったが、2010年から正式隊員が一般的に35人であることを定めている(達・他編2017:80)。

2. ウラーンムチルの時期区分

紅桂蘭(2019)はウラーンムチルの発展について4つの時期に区分している。紅は、1957年～1965年は草創期で、1966年～1976年は停止期と言い、1977年～2001年は回復と改革期で、2002年～現在⁹⁾まではウラーンムチルのブランド化期と指摘した(紅2019:50)。だが、『ウラーンムチル-赤峰市60年図誌(烏蘭牧騎-赤峰市60年図志)』(2017)によれば、1957年～1976年まではウラーンムチルの草創期であるという。つまり、紅桂蘭の区分する草創期に、中国文化大革命期をプラスし、新たな

⁵⁾ 本稿では、人を中国国家内の民族分類に従い、漢族、モンゴル族というように族で表記する。但し、引用やインフォーマントの情報をそのまま使う場合は、族に限らず、人を使う場合がある。

⁶⁾ 内モンゴルでは、歌舞団は内モンゴル文工団として、1946年4月1日に張家口で創設されている。1953年に内モンゴル歌舞劇院に、1956年に内モンゴル歌舞団に改名された。2000年に内モンゴル歌舞団をベースに内モンゴル民族歌舞団が誕生した(シンジルト2010:190)。2014年に内モンゴル民族芸術劇院と改名され、管轄下に9つの歌舞団体を持つようになった。文工団とは、歌、ダンス、芝居など様々な手段で宣伝活動を行う総合的な文芸団体のことをいう(貴志2000:241)。中国では文学と芸術の工作団体を略して文工団という。中国共産党には、政治宣伝の担い手として文工団が作られていた(松浦2000)。

⁷⁾ 『角』は工作する部屋を指し、『赤』はソ連の社会主義制度に関する革命性質的な文化教育活動を指す(王編2000:212)。

⁸⁾ 本稿では、歌舞団の構成員を団員とし、ウラーンムチルの構成員を隊員とする。ウラーンムチルは中国語で「紅色文化工作隊」と言うからである。

⁹⁾ 紅桂蘭が論文を書いた時期は2018年のことである。

草創期とした。さらに、『ウラーンムチル-赤峰市 60 年図誌』では、1977 年～1996 年を区切りに発展期と言い、1997 年～現在までは創新期¹⁰⁾ と時期区分した（郭・周編 2017：29-57）。以下は紅桂蘭と『ウラーンムチル-赤峰市 60 年図誌』の時期区分を参考に、内モンゴルにおけるウラーンムチルの発展とその社会背景を検討する。

ウラーンムチルの草創期と停止期は毛澤東の時代である。ウラーンムチルは、中国の反右派闘争¹¹⁾ の真中である 1957 年に創立された。その翌年の 1958 年に、集団所有制として人民公社¹²⁾ が設立した。また 1958 年から大躍進¹³⁾ という政策が実施された。翌年の 1959 年に中ソ対立が表面化し¹⁴⁾、国境や領土について、意見の対立が深刻化した。1960 年にソ連は中国で仕事していた 1390 人の専門家を引き上げさせ、科学技術協力項目を廃止した（毛里 1989a：46-66）。

しかし、大躍進は失敗し、1959 年毛澤東は国家主席の座を劉少奇に譲ることになる。劉少奇や鄧小平らは毛澤東が推進した大躍進政策を立て直そうと経済調整を行っていた。他方で、毛澤東は社会主義計画経済を理想とし、劉少奇や鄧小平らを「資本主義の実権派」と非難するとともに、教育、文化事業を通じて毛澤東崇拝を推し進めた。毛は大躍進の失敗を反省せず、劉に憤りを感じ権力の奪回を図った（陳 2016：102-106）。毛澤東は 1966 年に自らの復権をめざし、自身を崇拝する紅衛隊とよばれた学生たちや大衆を扇動し、文化大革命が勃発する（黄 2013：62）。

こうした中、歌舞団には個人崇拝を反映した「東方紅」¹⁵⁾ と似たような演目が作られていた。「東方紅」は人を太陽と例えたテーマである。また文化大革命時代（1966 年～1976 年）には階級闘争¹⁶⁾ を強調した内容が主題になった。ウラーンムチルの活動が停止され、一部が「毛澤東思想宣伝隊」と変更された。そして、毛澤東の指導する紅衛兵を讃えた作品が作られた。「この時期の特徴は文革の

¹⁰⁾ 社会主義文化の強い国を作る政策により新たな作品が強調されたことをいう。

¹¹⁾ 毛澤東が発動する右派分子に対する思想・政治闘争をいう。右派分子は共産党の「天下」やプロレタリア独裁を批判した知識人を指す。1958 年から約 55 万人の知識人が冤罪で辺境地域への労働改造や失職などの憂き目に遭い、あるいは死亡した。

¹²⁾ この人民公社は、工業、農業、商業等の経済活動のみならず、教育、文化事業も担う。さらには軍事機能ももっていた。

¹³⁾ 大躍進とは、社会主義国家建設のスローガンの一つで、15 年の間に農工業の生産でイギリスを追い越そうという計画であった。具体的には、鉄鋼の大増産を目指すものであり、中国全人民が総動員でスローガンを叫び、社会全体が熱狂した。大躍進は、内モンゴルにおいて、特に草原の開墾と鉄鋼業の発展という形で影響を与えた。また、「毛澤東は大躍進運動推進の一環として大々的な民歌・民謡の創作と収集を提案した」という（ミンガト 2016：114）。

¹⁴⁾ 1950 年代後半から中ソ両党イデオロギー対立が始まった。きっかけは 1956 年のフルシチョフのスターリン批判であり、ソ連が平和共存路線をとるようになったことであった。1959 年にソ連は 57 年の「国防新技術についての協定」を廃棄している（毛里 1989a：63）。1969 年には国境河川で局地紛争さえ起っている（毛里 1989b：114）。

¹⁵⁾ 「東方紅」は 1942 年に創られた革命性質を持つ個人崇拝の歌である。当時の共産党リーダーであった毛澤東とその組織の共産党を太陽と例えた作品である。1964 年から歌舞劇や映画化している。

¹⁶⁾ 階級闘争とは資本家階級と労働者階級の対立をいう。

政治的影響により、ウランムチの上演は革命様板劇をモデルにし、ウランムチの独自性が見られなくなって、完全に社会主義建設思想の宣伝の道具になった」（紅 2019：64）。

1977 年～1989 年はウランムチの回復期である。この時期、1978 年から鄧小平が権力を握り、改革開放政策を打ち出した。そのため、歌舞団には、鄧小平の実績を賛美した「春のストーリー」（春天的故事）という歌曲が流行した。この歌曲では鄧小平の南巡をめぐる深圳市、珠海市などの経済開発特区の計画を訴え、改革開放政策の路線により経済が急速に発展したことを讃えた。この時期のウランムチについて紅桂蘭は「ウランムチの活動は、文革期と違って、創作の自由を得て、モンゴル劇、歌、舞踊の創作は多くに現れ、民族文化の振興の傾向にあった」という（紅 2019：64）。

1990 年からは江澤民の時代は社会主義特色の現代化建設や、「三つの代表」¹⁷⁾ が主題になった。歌舞団には、「新時代に入ろう」（走進新時代）という歌曲がメインとして歌われた。この歌の歌詞には「我々は東方紅を歌い家で主人になり立ち上がった/我々は春のストーリーを話し/改革開放で豊かになった/以前の事業を受け継ぎ/開いていくリーダーたちは我々を新時代に連れて行く」と表現されている。この歌は「東方紅」と「春のストーリー」を讃え、その事業を受け継ぎ、新時代に連れて行くと江澤民の実績を賛美した。ウランムチにおいてこの時期は、紅桂蘭の区分方法では改革期に当たる。「改革開放後は市場経済に対応したウランムチの管理運営が求められるようになった」（紅 2019：67）。紅桂蘭はこの時期について、ウランムチは「国家財政への依存から文化産業市場に参入して利益を得ていた」と述べている。

2002 年に胡錦濤は中国共産党中央委員会総書記と抜擢され、翌年から国家主席になり、いわゆる胡錦濤と温家宝の時代になる。また胡温の時代ともいう。この時代は主に和諧社会（調和社会）や科学的発展観¹⁸⁾ が提唱された。そのため、歌曲の「領航中国」や、「盛世中華」などがメインになった。この時期は『ウランムチ-赤峰市 60 年図誌』（2017）に順次すれば、創新期に区分され、また、紅桂蘭の区分方法では、ウランムチのブランド化時期に当たる。『ウランムチ-赤峰市 60 年図誌』にしる、紅桂蘭の区分方法にしる、2010 年以降は時期区分されてない。本稿は 2010 年以降をより詳しく区分する。

2012 年から第五世代の中国共産党中央委員会の総書記には習近平が抜擢され、翌年に中華人民共和国の主席になった。この時代は習近平の提唱する偉大なる「中国の夢」と「偉大なる中華民族の復興」を賛美する。具体的にはオンニュード旗ウランムチの 2016 年の公演文芸プログラムでは「中国の夢を共築する」や、「復興に向かう」が主題になった。特に 2017 年、習近平がウランムチ創

¹⁷⁾ 一つ目は、中国の先進的な社会生産力の発展の要求を代表する。二つ目は、中国の先進的文化の前進の方向を代表する。三つ目は、中国の最も広範な人民の根本的利益を代表する。

¹⁸⁾ 和諧社会と科学的発展観というのは、経済、環境、官僚の腐敗、民族の対立などの格差を是正する事と「人を基本」とし、社会の各分野の「全面的」で、それらが協調した「持続可能な発展」観を目指す。

立 60 周年を機に手紙¹⁹⁾ を送ったことがウラーンムチルのブームを招いた。この時期は、つまりウラーンムチルの繁栄期になるだろう。

本稿は、ウラーンムチルのこうした時期区分から文革期（停止期）と回復期における上演作品（演目）の特徴を分析する。従って、筆者はプロジェクト論文（2020 年）においては、草創期の上演作品を分析した。本稿はプロジェクト論文の継続として述べる。

3. オンニュート旗ウラーンムチルの概要

3.1 オンニュート旗の概要

赤峰市は内モンゴル東部地域に位置し、オンニュート旗は赤峰市の中央部に位置している（図 2）。面積は 11.88 万 km² である。オンニュート旗誌（地方誌）によると 1953 年における中国の第 1 回人口センサスでは全旗の人口は約 19 万人で、漢族が 17.1 万人と圧倒的に多く、約 9 割（89.88%）を占めていた。次いで多いのがモンゴル族で 1.9 万人、約 1 割（9.92%）を占めた。その他に、回族が 221 人で、朝鮮族 125 人、満洲族 36 人、チベット族が 1 人いた。

文革期における正確なデータはないが、文革期前の 1964 年の中国の第 2 回人口センサスでは、全旗の人口は約 27.6 万人で、第一回人口センサスより 8.6 万人増加している。その内訳は、漢族が 24.6 万人（90.05%）で、7.5 万人も増加している。モンゴル族人口は 2.7 万人（9.65%）で、8 千人増加している。他に、回族が 359 人、満洲族が 240 人、朝鮮族が 125 人、チワン族が 14 人とチベット族、ダウール族、シェ族が各 1 人である。

回復期における人口は、1982 年の中国の第 3 回人口センサスによるものである。この年、全旗の人

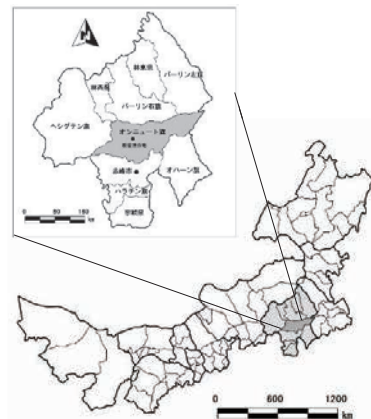


図 2 調査地域の赤峰市
オンニュート旗（筆者作成）

¹⁹⁾ 2017 年 8 月、ウラーンムチル創立 60 周年を機にスノド右旗ウラーンムチルは中国国家主席にウラーンムチルの発展に関する報告を行っている。ウラーンムチルが習近平の手紙の返事を受け取ったのは、2017 年 11 月 21 日という。以下は、その内容を中国語から翻訳している。「スノド右旗ウラーンムチルの隊員たちへ：あなた達の手紙からウラーンムチルの発展と党と人民に対する愛や事業に対する並々ならぬ熱心が伝わってきて、たいへんうれしく思う。ウラーンムチルは全国文芸戦線の旗印である。第 1 ウラーンムチルがあなた達の故郷に誕生して、60 年以来、ウラーンムチル隊員は、風雪をものともせず、寒暑をいとわず、長くゴビや草原を転々跋涉して、天をテントと為し、地を舞台と為し、広大なる農牧民たちに歓楽と文明をもたらし、党の声と配慮を伝えてきた。ウラーンムチルが絶えず明らかにしてきたことは、人民は芸術を必要とし、芸術もまた人民を必要とすることである。新たな時代、あなたたちに希望することは、党の十九大精神を手本に、ウラーンムチルの優秀な伝統を継承し、生活の土壌に根差し、牧畜民大衆に奉仕する。新たな文芸を創作し、地域に根差した文芸創作にさらに努め、継承に値する優秀な作品を作り、永遠に草原の『紅色文芸軽騎兵』たらんことである。 習近平（自署）2017 年 11 月 21 日」

口は約 40.2 万人である。第 3 回人口センサスには民族の内訳について記録していないが、その代わり 1985 年の人口センサスでは民族内訳について詳細に記録している。オンニュート旗における 1985 年の全旗の人口は 41.7 万人である。その内訳は漢族が 36.7 万人 (87.88%) で、第 2 回人口センサスより 12.1 万人増加している。モンゴル族人口は 4.7 万人 (11.31%) で、2 万人増加している。その中、満洲族が 2724 人 (0.65%)、回族 501 人 (0.12%)、朝鮮族が 117 人、チワン族が 39 人、チベット族が 5 人、ミョウ族が 3 人である (翁牛特旗志編委員会編 1993 : 178)。

つまり、オンニュート旗では以上の民族を対象にウラーンムチルが創立され、活動が行われていた。

3.2 オンニュート旗ウラーンムチルの概要

オンニュート旗ウラーンムチルの創立当時の隊員はわずか 4 名で、隊長 1 人と隊員 3 人から構成されていた。隊長は包文儒、隊員は烏国政、宝音、英格であった (内蒙古自治区文化庁編 1997 : 83)。さらに、辛吉勒図、徳力根の 2 人がいたという記録もある (劉・張編 2012 : 55)。すべてモンゴル族であった。包文儒と烏国政は文化館出身である (劉・張編 2012 : 121、125)。そのほかの隊員も文化館出身である可能性はあるが、資料に掲載されておらず、不明である。オンニュート旗ウラーンムチルは人口のわずか 1 割にも満たないモンゴル族だけで結成されていた。ウラーンムチル隊員の数は、文革期や回復期から徐々に増えていた。

設備は馬車 1 台、ガス灯 1 つ、幻灯機 1 つ、民族楽器 4 つ、12 着以上の民族衣装であった。

使用楽器は四胡、二胡、低音胡²⁰⁾、バイオリン、馬頭琴であった。

リハーサル室は約 20m² の文化室を使用していた。

上演は馬車を利用し、旗内の各村を巡回上演する形で実施された。また他地域のウラーンムチルと連携し、中国中央宣伝部、文化部の指示に従って、中国全土を巡回して上演していた。

4. 資料および実地調査について

近年、中国においてウラーンムチルの歴史資料 (内蒙古自治区文化庁編 1997 ; 烏編 2002 ; 達・朱編 2007 ; 劉・張編 2012 ; 達・朱・洪編 2017 など) やウラーンムチル隊員に関する回想録などが出版されるようになってきている (朱・吉編 2018 ; 王・刑編 2018 など)。

本研究はこれらの資料に依拠しているが、なかでも本稿が大きく依拠したのは『オンニュート旗ウラーンムチル誌 (翁牛特旗烏蘭牧騎志)』(2012 年) である。ウラーンムチルの演目については、最近のものはパンフレット化されており、入手することができるが、昔の演目に関するパンフレットはほとんど手に入らないため、『オンニュート旗ウラーンムチル誌』(2012) を参考とする。本誌はオンニ

²⁰⁾ 構造は二胡と似ている。二胡より大きく、音色が小さくて柔らかい。

ュート旗ウラーンムチルの創立から 2012 年までの組織の構成、上演作品、上演活動、奉仕²¹⁾、隊員について中国語でまとめられたものであり、主編集者は劉増軍と張仲仁である。劉増軍はオンニュート旗の文化・体育・ラジオ局・テレビ局局長で、張仲仁はオンニュート旗地方誌事務局の元主任であり、両氏ともに漢族である。また副編集として、オンニュート旗の文化・体育・ラジオ局・テレビ局副局長の王立柱・倣特根・李想・趙国新の 4 人と文化・体育・ラジオ局・テレビ局における紀律検査委員の隊長董華、ウラーンムチルの元隊長である張成富が参加している。倣特根のみモンゴル族で、他はすべて漢族である。また、筆者はこの資料にもとづき、ウラーンムチル隊員や関係者に対し聞き取り調査²²⁾を行っている。

5. オンニュート旗ウラーンムチルの上演作品

5.1 文革期の上演作品一覧

文革期（文化大革命）を中国の管制定義では、基本的に文化の破壊期の 10 年としている。この時期、オンニュート旗ウラーンムチルの活動は一時停止されている。ウラーンムチルには、1966 年から 1968 年までは、ほとんど演目が作られていない。『オンニュート旗ウラーンムチル誌』（2012）によれば、1966 年 5 月から文革が始まり、ウラーンムチルの隊員と指導者が衝撃を受けた。また車庫が破壊され、隊員の活動が停止されたという（劉・張編 2012 : 63）。そして、2 年後の 1968 年から活動を再開し、演目を作成し始めた。以下では、この時期の演目の特徴を見てみる。

ウラーンムチル文革期の上演作品についてまとめたのが表 1 である。

表 1 の項目は種類、上演作品名、由来、制作者／導入元からなる。

演目の種類には歌、ダンス、小戯、ホルボー²³⁾、歌舞がある。歌はリズムやメロディに合わせて声を出す行為を指す。ダンスは音楽に合わせて舞うことを指し、中国語で「舞踏」という。小戯は、民謡や民間舞踊や説唱などで構成されるストーリーのある小型総合性のパフォーマンス芸術を指す。ホルボーは「頭韻を持つ詩。掛け合いで激しく応酬されるものもある」（原山 1995 : 29）。歌舞は、歌いながら踊ることを指す。

上演作品名は『オンニュート旗のウラーンムチル誌』に記載されている漢語名を日本語に翻訳したものである。聞き取りによると、ほとんどモンゴル語名があったという。

オンニュート政府は『オンニュート旗ウラーンムチル誌』を編集する時、何度も会議を開催し、元

²¹⁾ 牧畜民や農民を手伝い、労働することをいう。農村、遊牧地域に入り、遊牧民、農民に生活、生産サービスを行う。例えば、図書の代理販売、撮影、散髪などである（紅 2013 : 172）。

²²⁾ 2018 年 9 月にフィールド調査も行った。フィールド調査後、電話や SNS を通じても確認している。

²³⁾ 『ウラーンムチルの路』では、『ホルボー』はモンゴル民族の民間的説唱形式の一種類であり、以前においては一人が楽器を持ち自ら歌う、或いは二人が対話の形式で歌うもの。解放後、多数人の『ホルボー』や漢語の『ホルボー』も出現した」という（内モン自治区文化庁編 1997 : 243）。漢語では「好来宝」と表記する。

隊員にも呼びかけ上演作品や上演活動に関する様々な資料を集めた。しかし、それでも記録されていない作品が多く、これに記録されている上演作品はその年において、一番人気があり、上演率が高い作品であるという²⁴⁾。毎年新規の作品が作られているが、文革期においては1966年、1967年、1969年、1970年、1971年、1973年の演目は記録されていない(表1)。

由来にはオリジナルと導入の2つがある。オリジナルはオンニュート旗ウラーンムチルが独自に創作したものである。また、すでにある歌に独自にダンスをつけたものについてもオリジナルとした。導入とは他の少数民族地域における民間作品や内モンゴルの他の歌舞団の作品を演じたものである。由来不明なものについては「？」記号で表示した。

制作者とは、歌やダンスなどについての作詞家、作曲家、振付師²⁵⁾、編舞者²⁶⁾である。導入の場合は導入元を記した。ダンスにおいては振付師と作曲家だけでなく、作詞家が存在する場合がある。制作者が不明なもの、一部しか分からない作品が少なくない。制作者や導入元が不明な場合についても「？」記号で表示した。

表1 文革期(1966年～1976年)の演目

年	種類	上演作品名	由来	制作(所属:民族)/導入元
68	歌	歌唱英雄李長順	オリジナル	オンニュート旗ウラーンムチル
72	ダンス	一回の訓練	オリジナル	振付:姜桂環(隊員:漢族) ²⁷⁾ 、 宋正玉(隊員:朝鮮族) ²⁸⁾ 、 薩仁(隊員:モンゴル族) ²⁹⁾ 作曲:王正義(隊員:漢族) ³⁰⁾
74	ダンス	一つの弾丸の袋	オリジナル	振付:宋正玉
		愉快的労働	?	?
75	ダンス	収穫の踊り	オリジナル	振付:宋正玉
		子羊の出産踊り	オリジナル	振付:宋正玉、薩仁、 王艶軍(隊員:漢族) ³¹⁾ 、 作曲:王正義
		民族の大団結	オリジナル	振付:宋正玉、薩仁、 烏国政(隊員:モンゴル族) ³²⁾
76	ダンス	老夫婦にご飯を送る	導入	?

²⁴⁾ W氏のインタビュー(2016年3月中旬)により整理したものである。W氏は、1969年生まれのモンゴル族で、男性である。1987年にオンニュート旗ウラーンムチルの成員として入隊した。2012年にオンニュート旗ウラーンムチルの隊長になっている。

²⁵⁾ 振付はオリジナルで創作した場合をいう。

²⁶⁾ 振付の基にもっとアレンジし、舞台用に編集した人を指す。

²⁷⁾ 姜桂環は1949年生まれの漢族女性で、1966年～1974年までオンニュート旗ウラーンムチルの隊員である。

²⁸⁾ 宋正玉は1944年生まれの朝鮮族女性で、1959年～1974年までオンニュート旗ウラーンムチルの隊員である。

²⁹⁾ 薩仁はモンゴル族女性で、1960年～1964年までオンニュート旗ウラーンムチルの隊員である。

³⁰⁾ 王正義は漢族男性で、1963年～1977年までオンニュート旗ウラーンムチルの隊員である。

³¹⁾ 王艶軍は漢族女性で、1971年～1978年までオンニュート旗ウラーンムチルの隊員である。

³²⁾ 烏国政はモンゴル族男性で、1957年～1977年までオンニュート旗ウラーンムチルの隊員である。

	長い白の雄鷹	導入	？
小戯	岷山の春風	導入	？
ホルボー	楊子栄が虎を打つ為に山に登った	導入	？
オペラ	悲痛の日	オリジナル	振付：ハス（隊員：モンゴル族） ³³⁾

出典：『オンニユート旗ウラーンムチル誌』（2012）により筆者作成

5.2 文革期の各年の上演作品

1966年～1968年まで演目がないことには、ウラーンムチルの活動は文革期の被害を受け、一時停止されたことに由来する。「この時期（文革期）は、全国各族人民の心に偉大な主導者である毛主席を讃えたものが流行した」からであるという（紀・邱編 1998：423）。そして1968年、オンニユート旗ウラーンムチルの活動は再開されものが、同年の10月から1969年1月にかけて「毛澤東思想の宣伝ステージ」（毛澤東思想宣傳站）に変更されている。つまりこの時期のウラーンムチルの活動は不安定である。

(1) 1968年の演目

1968年に上演された作品として「歌唱英雄李長順」という歌が記録されている。『オンニユート旗ウラーンムチル誌』（2012）には、この歌の創作要因について詳しく説明している。1968年4月に馬家溝門という人民公社³⁴⁾で国防の仕事をしていた戦士が、驚き走る馬を引き留めて、馬の足に踏まれそうな民衆を救ったという英雄の事実に基づき、「歌唱英雄李長順」という歌を作った。この歌がウラーンムチルに歌われ、地域の兵士や大衆に多いに歓迎された（劉・張編 2012：104）。李長順は国家の模範戦士として政府に動員されている。この歌はひとえに英雄的、模範的な人物に学ぶことを宣伝している。

(2) 1972年の演目

1972年に上演された演目にはダンス「一回の訓練」が記録されている。このダンスについて振付の姜桂環や宋正玉、薩仁と作曲の王正義が書かれているが、内容については説明されていない。国防兵士の訓練や生活を讃えたものと考えられる。

(3) 1974年の演目

1974年に記録されている上演作品はダンス「一つの弾丸の袋」及び「愉快的労働」がある。資料には、この演目についても説明されていない。タイトルから、軍人の弾丸を包む袋を作った人の技と労

³³⁾ ハス（ハス）はモンゴル族男性で、1964年～1984年までオンニユート旗ウラーンムチルの隊員である。

³⁴⁾ 農業の集団化を中心に、従来の農業生産共同組合である「合作社」を指す。

働の喜びを賛美したものとする。

(4) 1975年の演目

1975年に記録された上演作品は、ダンス「収穫の踊り」、「子羊の出産踊り」、「民族の大団結」の三つがある。これらの演目についても説明されていないが、インタビュー³⁵⁾によると「収穫の踊り」と「子羊の出産踊り」はモンゴルの文化、生活、技術、収穫を讃えたものであり、「民族の大団結」は中国の各民族の団結を呼びかけた作品であるという。

(5) 1976年の演目

1976年はダンス「老夫婦にご飯を送る」と「長い白の雄鷹」及び小戯「岷山の春風」やホルボー「楊子栄が虎を打つ為に山に登った」、オペラ「悲痛の日」という作品が記録されている。「老夫婦にご飯を送る」は延辺歌舞団に学習した演目である。ストーリーは、朝鮮族の老夫婦が公共施設建設のために働いていた労働者にご飯を送っていた事実に基づいて作ったものである³⁶⁾。

ダンス「長い白の雄鷹」については説明されていない。

小戯「岷山の春風」の岷山は甘粛省から四川省まで伸びる山脈を指す。しかし、作品の内容については、数人の老隊員（古参隊員）に聞いても判明しなかった。

ホルボー「楊子栄が虎を打つ為に山に登った」は、山東省の楊子栄という八路軍（紅軍）の若手戦士が国民党軍基地にスパイとして入り、少人数で多くの敵を滅ぼしたことで有名になった。彼は、敵との戦いの中に犠牲となっている。本来は漢族地方の出来事であるが、モンゴル族はこのストーリーを讃えたホルボーを作ったと考える。

オペラ「悲痛の日」は、1976年に中国国家最高の指導者であった毛澤東が亡くなったため、隊員のハス（ハス）が彼のことを悲しく思い作った作品である（劉・張編 2012：75）。

オンニュート旗ウラーンムチルは文革期において、上述した作品の制作や公演活動（巡回を含む）以外に映画製作活動にも参加していた。1972年、オンニュート旗ウラーンムチルは中国中央テレビ局国際番組の監督や遼寧省の画報記者及び瀋陽テレビ局の撮影者らと連携し、『草原の軽騎』（草原軽騎）と『草原上の文芸軽騎兵隊』³⁷⁾（草原上の文芸軽騎隊）という映画を作った（劉・張編 2012：70）。

文革期演目のまとめ：まず、この時期、演目は少ないことが分かる。ウラーンムチルの活動はこの時期2年ほど停止され、1968年に再開した。ウラーンムチルは再開を機に「歌唱英雄李長順」という歌を作った。この時期、演目の種類も少ない。こうした結果は文革と深く関わると考える。また演目

³⁵⁾ 2020年2月23日、ハストヤ（ハス図雅）のインタビューである。ハストヤは1964年生まれ、モンゴル族女性である。1983年からオンニュート旗ウラーンムチルで働き、2012年から文化局で転勤している。

³⁶⁾ 2020年2月21日、オンニュート旗ウラーンムチル隊長ウエンにウィーチャットで確認した。

³⁷⁾ ウラーンムチルの特徴から付けた名前である。移動に便利な文芸宣伝隊の意味である。

「収穫の踊り」、「子羊の出産踊り」以外のほとんどの演目は、政治イデオロギーを反映している。

5.3 回復期の上演作品一覧

回復期は鄧小平の時代であり、改革開放政策を唱えている。この時期は、文革期において、批判されたものが徐々に回復した。特に工業化、産業化の政策の下で文芸プログラムが盛んであった。例えば、表2の企業の発展を讃えた大型評劇「甘たるい事業」や絨毯事業の拡大を呼びかけた群舞「絨毯を織る女性労働者の喜び」などがまさしく鄧小平の改革開放と市場経済主義的な要素に取り組んでいる。以下に詳しく分析する。

表2の項目は種類、上演作品名、由来、制作者／導入元からなる。

演目の種類には歌、ダンス、話劇、大型評劇、大型話劇、歌舞、オペラ、群舞、モンゴル歌劇、モンゴル戯劇がある。話劇は、京劇などの旧劇が歌舞を中心とするのに対し、会話（台詞）に重点を置く演劇ジャンルの一種である。大型評劇は、中国北方の地方劇名である。京劇は国家の大劇であり、これに対し、評劇は北平における地方の劇である。評劇は社会を評論することに由来する。評劇を大型で修飾することは、より多くの演者が参加することを意味する。大型話劇も同じ意味を待つ。オペラは、演劇と音楽の合わせである。群舞は、多くのダンサーにより踊ることを指す。

由来にはオリジナルと導入と改変と翻訳の4つがある。オリジナルはオンニユート旗ウラーンムチルが独自に創作したものである。また、すでにある歌に独自にダンスをつけたものについてもオリジナルとした。導入とは他の少数民族地域における民間作品や内モンゴルの他の歌舞団の作品を演じたものである。改変は民間で普及していた民謡やダンスなどを舞台用に編集した作品をいう。翻訳は、モンゴル語の作品を中国語で翻訳し演じたこと、或いはその逆の場合を指す。

制作（所属：民族）/導入元は、表1と同じ意味である。

表2 回復期（1978年～1989年）の演目

年	種類	上演作品名	由来	制作（所属：民族）/導入元
77	歌	草原の子女が延安を愛する	オリジナル	作詞：朱・嘉庚（宣伝部：漢族） 作曲：祈・達林太（団員：モンゴル族）
78	ダンス	草原の楽しみ	オリジナル	振付：孟慶生 ³⁸⁾ （隊員：モンゴル族）
	話劇	声の届かない処がない	導入	？
79	大型評劇	甘たるい事業	導入	赤峰県ウラーンムチル
	大型話劇	あの人を助けて	導入	？
80	ダンス	赤い旗を縫い取る	導入	振付：宋正玉
	話劇	英雄の牧畜工人双喜	オリジナル	？
	オペラ	嫁を奪い取る	改変	モンゴル民謡
	オペラ	嫁を争い娶る王氏の虎	導入	？

³⁸⁾ 孟慶生はモンゴル族男性で、1977年～1990年までオンニユート旗ウラーンムチルの隊員である。

	大型評劇	愛情の審判 二伯母の病気を治す	導入 導入	? ?
81	評劇	近隣	導入	?
83	ダンス	オルドス踊り	導入	振付：賈作光（団員：満洲族）
84	群舞	絨毯を織る女性労働者の喜び	オリジナル	振付：李玉珍（隊員：漢族） ³⁹⁾ 作曲：李信（隊員：漢族） ⁴⁰⁾
	歌	シラムロン母親の河	?	?
	ダンス	ホジャの狩り曲	オリジナル	振付：李玉珍
		悔恨	オリジナル	振付：張勇（？） 作曲：ハス
		モンゴル馬	オリジナル	振付：張勇
		幸せな青年	?	?
		ホリハ支隊	オリジナル	振付：張勇
		各族の人民の心と心がつながる	オリジナル	振付：李玉珍
	愉快な祝日	オリジナル	振付：孟慶生	
	延安を愛する	オリジナル	振付：ハス凶雅（隊員：モンゴル族） ⁴¹⁾	
85	戯劇	銀海の赤い花	翻訳	翻訳者：烏日娜（隊員：モンゴル族） ⁴²⁾ 、 道・巴雅爾（？）、 查干・巴特爾（隊員：モンゴル族） ⁴³⁾
	ダンス	ナルカジドマ	改変	チベット民間舞踊
		豊かな生活へ歩む	オリジナル	振付：孟慶生
		緑葉の情け	オリジナル	振付：李玉珍、ハス凶雅 作曲：宋滙霖（？）
		柳木の愛	オリジナル	振付：李玉珍
	愛が深い	オリジナル	振付：李玉珍	
86	戯劇	ノルグロマ	改変	モンゴル民謡
88	オペラ	ハンシュウイン	改変	モンゴル民謡
89	ダンス	ブレイクダンス	導入	振付：特木其楽（隊員：モンゴル族） ⁴⁴⁾
		蠟燭	?	?
		運命	オリジナル	振付：李玉珍、ハス凶雅
		出征	オリジナル	振付：李玉珍、ハス凶雅

出典：『オンニュート旗ウラーンムチル誌』（2012）により筆者作成

5.4 回復期の各年の上演作品

(1) 1977年の演目

1977年に記録された上演作品では歌「草原儿女延安を愛する」がある。歌「草原の子女が延安を愛す

³⁹⁾ 李玉珍は1945年生まれの漢族女性で、1958年～1997年までオンニュート旗ウラーンムチルの隊員である。

⁴⁰⁾ 李信は漢族男性で、1980年～2002年までオンニュート旗ウラーンムチルの隊員である。

⁴¹⁾ ハストヤ（ハス凶雅）については、注の35番で説明している。

⁴²⁾ 烏日娜はモンゴル族女性で、1974年～1982年までオンニュート旗ウラーンムチルの隊員である。

⁴³⁾ 查干・巴特爾はモンゴル族男性で、1959年～1966年までオンニュート旗ウラーンムチルの隊員である。

⁴⁴⁾ 特木其楽はモンゴル族男性で、1983年～2012年までオンニュート旗ウラーンムチルの隊員である。

る」の内容は延安における革命精神を讃えたものである（劉・張編 2012 : 42）。延安は中国共産党の革命聖地、或いは革命根拠地であることに由来する。この歌は 1965 年にウラーンムチルが延安へ巡回上演する途中で作られている。作詞は朱嘉庚⁴⁵⁾で、作曲は祈・達林太⁴⁶⁾である。朱嘉庚は、オンニュート旗の宣伝部から赤峰市文化局へ転職し、のちに文化局の局長まで昇進した。祈・達林太は内モンゴル文工団（歌舞団）の団員とあるが、詳しい記載はない。この作品はオンニュート旗宣伝部から導入したと言えよう。

(2) 1978 年の作品

1978 年に記録されている作品はダンス「草原の楽しみ」と話劇「声の届かない処がない」がある。

ダンス「草原の楽しみ」は改革開放政策の実施により、牧畜民が豊かで楽しい生活を送っている状況を報告として描いた作品である⁴⁷⁾。

話劇「声の届かない処がない」は、1976 年に鄧小平が文革中、第三回に渡って被害を受けた事実を基に作った作品である⁴⁸⁾。この作品は、共産党中央委員会の政治思想に最も協力したものである（劉・張編 2012 : 102）。要するに文革の被害を是正する政策に当たるものとみられる。

(3) 1979 年の演目

1979 年に記録された作品は大型評劇「甘たるい事業」と大型話劇「あの人を助けて」がある。

大型評劇「甘たるい事業」は改革開放政策で、事業が繁栄し、より多くの人に経済的な恩恵を与えていることを賛美した⁴⁹⁾。この作品は、牧畜民に共産党の一人っ子政策（計画生育政策）を宣伝した作品である（劉・張編 2012 : 102）。インタビューと資料から、この作品は経済発展には、一人っ子政策が不可欠であることを宣伝したと考えられる。

大型話劇「あの人を助けて」は、青少年の犯罪を防ぐために作った教育目的の演目である（劉・張編 2012 : 77）。

⁴⁵⁾ 朱嘉庚は 1942 年生まれ、漢族男性で、四川省の人である。1963 年に上海戯劇学院を卒業し、その後内モンゴルの赤峰市を中心に宣伝部、歌舞団、文化局などで仕事している。

⁴⁶⁾ 内モンゴル直屬ウラーンムチルの隊員ウルガの聞き取りによると祈・達林太はモンゴル族で、内モンゴル文工団（歌舞団）の団員であったという（2020 年 2 月 21 にウィーチャットで確認した）。資料によって祈・達林太とも記されている。本稿では祈・達林太に統一する。

⁴⁷⁾ 2020 年 2 月 8 日、オンニュート旗ウラーンムチル元隊員であったメデエグにウィーチャットでインタビューして確認した。メデエグは 1963 年生まれ、モンゴル族女性で、1977 からウラーンムチルの隊員になった。現在はオンニュート旗の文化局で働いている。

⁴⁸⁾ 2020 年 2 月 8 日、内モンゴル民族芸術劇院所属ウラーンムチル隊員であるウルガ（注 46 番と同じ人物）にウィーチャットでインタビューを行った。ウルガは 1961 年生まれ、モンゴル族男性である。1978 年～1987 年までオンニュート旗ウラーンムチルで働き、1987 年から内モンゴル自治区直屬ウラーンムチルで働いている。

⁴⁹⁾ 2020 年 2 月 8 日、メデエグにウィーチャットでインタビューした。

(4) 1980年の演目

1980年に記録された作品はダンス「赤い旗を縫い取る」、話劇「英雄の牧畜工人双喜」及びオペラ「ダナバラ」、「嫁を争い娶る王氏の虎」や大型評劇「愛情の審判」と「二伯母の病気を治す」がある。

ダンス「赤い旗を縫い取る」は、中国の国旗を縫い取ることを指す。1961年の小説『紅岩』をオペラ「江姉」として改編し、その中の歌「绣红旗」を基に作られた踊りである。中国の内戦時代、国民党に政治犯として掴まれていた共産党員は新たな中国が成立する際、五つ星の赤い旗を国旗にした事を聞き、刑務所の中で国旗を縫い取ったという物語である。

話劇「英雄の牧畜工人双喜」は、公社の牧畜出身の工人が羊の群れを守るために、長い時間をかけて砂嵐と戦って犠牲となった物語である（劉・張 2012：104）。

オペラ「嫁を奪い取る」は、モンゴル民歌（民謡）ダナバラ（*danabal*）をオペラとして改変した作品である。注目する点は、資料では特にモンゴルという語を強調し、モンゴル・オペラ「嫁を奪い取る」と記録している。ダナバラは、若者の恋愛ストーリーであり、その内容は、恋人である男性が強制的に徴兵されたため、女性が両親の意志で強制的に結婚させられたことを描いたものである（Ünen2007:2）。この作品は内モンゴルのウラーンムチル演目の中では、初めて作られたモンゴル・オペラであるという⁵⁰⁾。

「嫁を争い娶る王氏の虎」は、漢族の歌劇を編纂している。宋朝時代を背景とする。官僚（虎）が廟に行き、友達とゲームを行っていた女のなりをした男性を捕まえ、強制的に結婚するとした。結果的に、男性が虎の妹と恋愛した戯劇的な歌劇である。つまり、封建制度的、旧社会的風俗を是正した作品である⁵¹⁾。まさに共産党のお陰で変わりゆく新たな社会と自由恋愛を賛美したものとみられる。

大型評劇「愛情の審判」は、一人の恋に落ちた少女が様々な人に騙されて苦勞し、その後一人の青年に救われ正しい道を歩んだストーリーである。

「二伯母の病気を治す」は旧社会を背景した物語である。物語では、二人の伯母が娘の自由恋愛を阻止していたが、親戚に説得されたことを書いている⁵²⁾。

(5) 1981年の演目

1981年に記録された作品は評劇「近隣」である。しかし、「近隣」については、説明されていない。

(6) 1983年の演目

1983年に記録された上演作品はダンス「オールドス踊り」である。

⁵⁰⁾ 2020年2月8日、ウルガにウィーチャットでインタビューした。

⁵¹⁾ 2020年2月8日、ウルガにウィーチャットでインタビューした。

⁵²⁾ 2020年2月21日、ウラーンムチル隊長ウエンにウィーチャットでインタビューした。

ダンス「オールドス踊り」は、1954年に内モンゴル文工団の団員賈作光によって作られた。このダンスは、オールドス地域における伝統婚姻儀礼を基に新たな中国成立以降の内モンゴル人民の幸福な生活を描いている。このダンスについて、『中国少数民族舞蹈史』では、労働・収穫の題材として分類されている（紀・邱編 1998：418）。つまり、共産党の指導下で、牧畜民は安定な生活を送り、労働や収穫を得ていることを指摘したと考える。

(7) 1984年の演目

1984年に上演された作品は群舞「絨毯を織る女性労働者の喜び」及び歌「シラムロン母親の河」とダンス「ホジャの狩り曲」、「悔恨」、「モンゴル馬」、「幸せな青年」、「ホリハ支隊」、「各族の人民の心と心がつながる」、「愉快的祝日」、「延安を愛する」など10作品が記録された。

群舞「絨毯を織る女性労働者の喜び」は、オンニュート旗ウラーンムチルの隊員が地域の絨毯工場を見学し、絨毯の制作体験として作った。この工場の絨毯は品質的に優れており、日本、アメリカを始め様々な国に輸出されているという（劉・張編 2012：38）。この演目は国家の政策の元で労働者の生活が豊かになっていることを讃えたものである。

歌「シラムロン母親の河」は、通遼市における遼河を指し、農業や家畜の水源として多くの命を育てていることを讃えた作品である。この歌は、故郷の川や山の賛歌であり、政治的要素はない。

ダンス「ホジャの狩り曲」は、ウラーンムチルの隊員李玉珍が牧畜民の中で公演した時、牧畜民に聞いた話に基づいて作った作品である。李は牧畜民に「古代のモンゴル人は狩猟する際、竹で作った笛の特殊な音声を使い、野生動物を身近なところに誘導していた」ことを言われて作った（劉・張編 2012：38）。このダンスは、モンゴルの生業技術を讃えた作品である。

ダンス「悔恨」(*yemshil*) は、一人の女性が恋に落ち、反社会勢力と協力し、刑務所に入れ、教育を受けて反省した物語である⁵³⁾。要するに教育の目的から制作された。

ダンス「モンゴル馬」はモンゴル馬の忍耐力や迫力やスピードの速さなどを讃えた踊りである⁵⁴⁾。

ダンス「各族の人民の心と心がつながる」は各族の人民が共産党と毛澤東の下で団結するエピソードを描いた作品である（内蒙古自治区文化局編 1965：42）。このダンスのタイトルの歌は1965年に誕生している。また振付はオンニュート旗ウラーンムチルの隊員李玉珍であることから、このダンスは歌「各族の人民の心と心がつながる」を元に作ったと考える。

ダンス「延安を愛する」は、共産党の革命根拠地である延安を愛し賛美した作品である。

1984年の演目「豊かな生活へ歩む」、「幸せな青年」、「ホリハ支隊」、「愉快的祝日」などについては説明されていない。だが、「豊かな生活へ歩む」、「幸せな青年」、「愉快的祝日」は国家政策の元で幸

⁵³⁾ 2020年2月23日、ハストヤにウィーチャットでインタビューした。

⁵⁴⁾ 2020年2月8日、メデェグにウィーチャットでインタビューした。

せて豊かな生活を送っていることを讃えたのであろうと考える。「ホリハ支隊」は地域における軍隊を賛美したものであろう。

(8) 1985年の演目

1985年の上演作品は戯劇「銀海の赤い花」及びダンス「ナルカジドマ」、「豊かな生活へ歩む」、「緑葉の情け」、「柳木の愛」、「愛が深い」など6作品が記録されている。

戯劇「銀海の赤い花」は改革開放政策で个体戸⁵⁵⁾が多くなり、个体戸の中で裕福になった模範的な人物を讃えた作品である(劉・張編 2012: 51)。共産党の第十二期三中全会後、商品の生産が促され、牧畜民が共産党の指導下で豊かになったことを描いている(劉・張編 2012: 102)。この演目については、資料にモンゴルを強調し、モンゴル・オペラ「銀海の赤い花」と記録し、さらに漢語(中国語)で翻訳し演じたと述べている。

ラマ祭りのダンス「ナルカジドマ」(娜若・卡吉徳瑪)はチベット仏教における密宗祭神の舞踊である。赤峰市のハラチン旗王府鎮で流行していた踊りで、200年の歴史を持っている。ナルカジドマは人の名前であり、また女神と言ひ、宇宙の邪悪を追い払い、人間の幸福や善を保護する機能を持っているという。この踊りは仏教の經典『ナルカジドマ』の読み会で踊る(中国民族民間舞踏集成編 1994: 160)。宗教的な内容に基づいて作った演目である。これは、つまり文革中に迷信として禁じられていた宗教活動が少しずつ復活したことを明かす。この演目は、民族の文化的・宗教的なものである。

ダンス「豊かな生活へ歩む」は改革開放政策や市場経済主義政策により人民の生活が豊かになったというエピソードを描いている⁵⁶⁾。

「緑葉の情け」は砂漠化の深刻な問題を反映し、環境保護問題を呼びかけて作った(劉・張編 2012: 39)。

「柳木の愛」は契丹(キタイ帝国)民族文化に基づいて制作した。考古で契丹の文物である銅鏡が発見されたが、その銅鏡に青年男女の舞者(ダンサー)が踊る様子が描かれていた。ウラーンムチル隊員は銅鏡に描かれていた青年男女の弓矢を持ち、柳木を振り回す様子を模倣し、ダンスを作った。これは、つまり契丹民族の青年男女の愛情をテーマにしたものである(劉・張 2012: 38)。

「愛が深い」は青年男女の自由恋愛を賛美したラブソングであると考えられる。こうした自由恋愛を主題としていた演目は、新たな中国成立当時、解放を前提していた。いわゆる地主、牧畜主、資産階級などの抑圧で自由恋愛できていないものが新たな中国の成立により解放され、自由に恋愛できたことを讃えていた。しかし、改革開放政策下でのこれらの演目は中国成立当時から既に30年の歳月を経ている。要するにこの時代の自由恋愛をテーマとする演目は、鄧小平の政策でより豊かに安定し

⁵⁵⁾ 生産隊と対比している。毛澤東時代、生産隊があったものが、徐々に分散された。

⁵⁶⁾ 2020年2月8日、メデェグにウィーチャットでインタビューした。

て暮らしている様子を描いたラブソングになったのだろう。

(9) 1986年の演目

1986年に上演した作品では戯劇「ノルグロマ」が記録されている。

戯劇「ノルグロマ」(*nolyarm-a*)はモンゴル民謡を基に作った演目である。こうした中、特にモンゴルを強調し、モンゴル戯劇「ノルグロマ」と記録している。「ノルグロマ」は女性の名前で作られた民謡である。ノルグロマは興安盟のトシエト旗の牧畜民の娘であり、その旗の裕福な牧畜民の息子と結婚した。しかし、当時は若者たちを強制的に軍隊に行かせる任務があったため、結婚したばかりの旦那が軍隊に行かされた。ノルグロマは旦那がいなくなった間、姑に苦しめられ、毎日悲しい生活を送っていたという物語である(Rinčin 他編 1979: 135-136)。要するに家庭暴力や虐待への批判と貧富の格差を是正する視点から、教育の目的で制作した作品と考える。

(10) 1988年の演目

1988年に上演した作品ではオペラ「ハンシュウイン」が記録されている。

オペラ「ハンシュウイン」(*qan shiu ying*)はモンゴルの民謡を基に作った演目である。資料では、この演目についても、またモンゴルを強調し、モンゴル・オペラ「ハンシュウイン」と記録している。「ハンシュウイン」も女性の名前で命名された民謡である。ハンシュウインは元々自分の好きな恋人がいるにもかかわらず、封建婚姻制度の下で強制的に結婚させられた。モンゴル民謡における悲劇的な物語である(Ünen2007: 52)。こうした民謡を基に作った演目は、ほとんど旧社会の搾取や迫害を裁き、自由・民主的な社会制度の導入を呼びかけたテーマである。元々民間で流行していたものが、共産党や政府の政策と合わせて新たに改変されている。本質的に共産党政府の指導を讃えたものであると考える。

(11) 1989年の演目

1989年に記録されている上演作品は「ブレイクダンス」、「蠟燭」、「運命」、「出征」など4つある。

「ブレイクダンス」は、元々西洋で流行していたものが、中国に導入されている。それは、つまり中国はこの時代に改革開放政策により国際的な交流が頻繁になっていたことと、グローバル化の影響が広がっていたことを意味する。

さらに、ウラーンムチルは外国から輸入されたDJ音楽に合わせて「運命」と「出征」を作った⁵⁷⁾。しかし、これら演目の内容については説明されていない。

⁵⁷⁾ 2020年、8月11日、ハストヤにウィーチャットでインタビューした。

「蠟燭」は、医者を蠟燭と例え、彼らの犠牲精神を賛美した作品である⁵⁸⁾。

回復期演目のまとめ：この時期、演目の種類が多様化されている。歌舞、ホルボーという少ない種類から評劇、話劇、戯劇のジャンルが増えた。国際的な頻繁交流により、他国の演目が登場している。また、モンゴル民歌、オペラ、戯劇というように演目の種類にモンゴルを付け、モンゴル固有、民族固有の演目として特徴付けている。この時期の上演作品について先行研究ではこのようにまとめている。「70年代後半、80年代に入りウランムチは多くのモンゴル人に愛される作品を創作した。この内容は多様であり、特にモンゴルという特徴を表現した草原、馬、歴史人物の歌は多くに現れた」という（紅 2019 : 67）。

6. 文革期と回復期の上演作品の総括

本章では、文革期と回復期ウランムチの上演作品を以下の4つに着目して検討する。

①上演作品数とその種類

資料から判明した作品は、文革期においては、12作品があり、回復期においては、35の作品がある。その中文革期では、歌が1作品、ダンスが8作品、小戯が1作品、ホルボーが1作品、歌劇が1作品である。回復期では、歌が2作品、ダンスが20作品、話劇が2作品、大型話劇が1作品、評劇が1作品、大型評劇が3作品、群舞が1作品、オペラが4作品、戯劇が1作品である。

文革期においては、作品と種類がともに少ないことが特徴である。こうした結果は、文革の被害と深く関わると考える。回復期では、作品が多くなるとともに演目のジャンルが増えている。さらに話劇や評劇については、大型話劇や大型評劇というような形でより多くの演者を参加させていたことが分かる。

②上演作品の由来

上演作品の由来はオリジナルと導入と改変と翻訳の四種類がある。文革期において、オリジナルは7作品があり、導入が4作品と1つの作品が由来不明である。回復期において、オリジナルは17作品があり、導入が10作品で、改変が4作品と翻訳1作品で由来不明は3作品がある。オリジナルはウランムチの隊員が自ら積極的に作っていた作品であり、草創期からあったものである。ただし、作詞作曲、振付など一部しか判明されていない作品がほとんどである。導入は内モンゴルの他機関から、或いは他の少数民族歌舞団から導入したものである。しかし、この中で、ほとんどの作品については、導入元が判明されていない。改変はほとんどモンゴル民謡の改変に由来する。翻訳は1作品であり、モンゴル族のオペラを中国語に翻訳し、演じたものである。この演目の翻訳から、ウランム

⁵⁸⁾ 2020年、8月11日、ハストヤにウィーチャットでインタビューした。

チルはオンニユート旗では漢族が圧倒的に多い事実に配慮していること、そしてウラーンムチルはモンゴル地域だけでなく、漢族の地域でも活動していたことが分かる。

③上演作品の制作者

所属が分かっている制作者を見ると姜桂環、宋正玉、薩仁、烏国政、王正義、王艶軍、孟慶生、李玉珍、李信、ハス、烏日娜、査干・バ特爾、ハス図雅、特木其樂など 14 人はオンニユート旗ウラーンムチルの隊員である。この中、モンゴル族の隊員が 8 人で、漢族隊員が 5 人、朝鮮族の隊員は宋正玉の 1 人である。

朱嘉庚は宣伝部の人でありながらも、ウラーンムチルの作品制作に携わっている。彼は内モンゴル文工団の団員祈・達林太と「草原児女延安を愛する」を創作している。

賈作光も内モンゴル文工団の団員である。彼の創作した「オルドス踊り」は 1954 年にオルドス地域における伝統婚姻儀礼を基に制作した。ウラーンムチルは彼の作品を導入し、演じている。

道・巴雅爾、張勇、宋滙霖については所属が不明である。

④上演作品のテーマとその変遷

上演作品の内容について、様々なテーマの作品が見られる。文献の説明によるものであり、とりわけダンスによるメッセージをどのように読み取るのかはむずかしいところがある。まず、政治性がないと言い切れる作品はわずかである。1975 年ダンス「子羊の出産踊り」、1984 年歌「シラムロン母親の河」、及びダンス「ホジャの狩り曲」、「モンゴル馬」など牧畜技術や自然を主題にしたものがある。また 1985 年のラマ祭りのダンス「ナルカジドマ」は民族文化、宗教信仰に基づいて作られている。

上述以外、ほとんどの演目は政治的要素がある。1968 年歌「歌唱英雄李長順」は模範人物を讃え、1972 年ダンス「一回の訓練」と 1976 年ホルボー「楊子榮が虎を打つ為に山に登った」及び 1984 年ダンス「ホリハ支隊」は社会主義や国防兵士や労働者の革命精神を讃えたものである。1975 年ダンス「民族の大団結」と 1984 年ダンス「各族の人民の心と心がつながる」は民族の団結を呼びかけている。1976 オペラ「悲痛の日」は共産党リーダーである毛澤東を崇拜し、彼が死去したことを追悼するために作った作品である。1978 年の話劇「声の届かない処がない」と 1979 年の大型評劇「甘たらい事業」と 1980 年の話劇「英雄の牧畜工人双喜」及び 1985 年ダンス「豊かな生活へ歩む」は鄧小平の行った文革の被害を是正する政策及び改革開放政策を讃えたものである。1979 年の大型話劇「あの人を助けて」及び 1980 年の大型評劇「愛情の審判」は青少年の教育の目的で作った作品である。さらに環境保護をテーマにした 1985 年ダンス「緑葉の情け」などもある。また愛情や自由恋愛をテーマとして 1985 年ダンス「柳木の愛」と「愛が深い」がある。医者 の 事業 を テーマ に した 1989 年ダンス「蠟燭」がある。国際化やグローバル化の影響により 1989 年から「ブレイクダンス」も導入されている。

7. おわりに

ウラーンムチルは文化館をもとに文化館の代替として作られた小規模的で移動性があり、かつ総合性の歌舞団である。ウラーンムチルの創立は、ソ連の文化館の影響を受けたとともに、ソ連やモンゴル人民共和国、中華民国時代に創られた文化施設の影響を受けている。さらに満洲国の影響も受けている (T.アルタン 2020)。上演作品について、文革期では、社会主義思想、毛澤東崇拜、国防兵士、革命精神、民族団結など種類が少ないことと演目の数が少ないことが分かる。だが、回復期においては各種類の演目が注目され、演目の数が何倍も増えている。演目の種類として改革開放政策、模範人物、環境問題、牧畜技術、教育、自然、愛情をテーマにした様々なジャンルの演目が制作された。さらに、回復期では、モンゴル民謡、オペラ、戯劇という演目の種類にモンゴルという修辭語を使い、モンゴル固有、民族固有の演目として特徴付けている。またモンゴル民謡を改変し、演目を制作していたことは、モンゴル族に馴染み、身近なものを取り入れ、より多くの観客を集めるためであると考ええる。しかし、それでも、これらの時期では、オンニュート旗という地域性はまったく無かった。

謝辞

本論文の完成にあたり、多くの方々の協力を頂きました。まず、オンニュート旗ウラーンムチルの隊長ウエンさんに感謝を申し上げます。ウエンさんはウラーンムチル活動の多忙を極める中、インタビューや聞き取り調査に時間を割いて協力していただいたことに心より謝意を表します。また、ウラーンムチル隊員のハストヤ氏、ウルガ氏及びメデェグ氏には多忙中、インタビューや聞き取り調査に協力していただいたことにお礼申し上げます。

そして、公益財団法人・岡本国際奨学交流財団に2年間奨学金を給付していただき、本論文の調査や資料収集に専念することができました。また、同財団のスタッフを始め、理事長には長い間、大変お世話になりました。特に財団理事長の岡本和久さんに学業や生活において大変多くの励ましを頂きました。

最後に、本論文の校正やネイティブチェックに当たり、岡本国際奨学交流財団のスタッフ館上浩太さんにプロジェクト論文から、何度もチェックしていただき、日本語の誤りを訂正することが出来ました。この場を借りて感謝を申し上げます。

引用文献

【日本語】

原山煌

1995 『モンゴルの神話・伝説』 東方書店

黄文雄

2013『真実の中国史1949-2013』ビジネス社

紅桂蘭

2013「中国内モンゴル自治区における民族文化活動に関する考察—通遼市のウランムチを事例にして—」『教育学論集』9, pp.155-175

2019「中国における少数民族文化活動に関する研究：モンゴル族にみる民族文化と国民統合」筑波大学12102甲第9102号, pp.1-153

貴志俊彦

2013『東アジア流行歌アワー』岩波書店

松浦恒雄

2000「宣伝の担い手—文工団とその役割」牧陽一, 松浦恒雄, 川田進編『中国のプロパガンダ芸術』岩波書店, pp.35-64

毛里和子

1989a『中国とソ連』岩波書店

1989b「中ソ対立の構造—対立の二〇年をどう評価するか」山極晃, 毛里和子編『現代中国とソ連』日本国際問題研究所, pp.114-139

ミンガド・ボラグ

2016『「スーホの白い馬」の真実』風響社

シンジルト

2010「オラーンムチル現象に見る内モンゴル・インパクト」小長谷有紀, 川口幸大, 長沼さやか編『中国における社会主義的近代化—宗教・消費・エスニシティ』勉誠出版, pp.185-217

T.アルタンバガナ

2020「ウラーンムチル芸術歌舞団の草創期における上演作品—中国内モンゴル自治区赤峰市オンニェウト旗の事例から—」児玉香菜子編『環境変動下における先住民の文化芸術・継承活動とその変遷』, pp.5-27

【中国語】

陳破空

2016『傾斜的天安門』台湾博出版社

達・阿拉坦巴干, 朱嘉庚編

2007『民族文化品牌烏蘭牧騎贊』内モンゴル自治区烏蘭牧騎学会

達・阿拉坦巴干, 朱嘉庚, 洪涛編

- 2017 『烏蘭牧騎發展史』 內蒙古自治區藝術研究院
郭玉峰, 周金柱
- 2017 『烏蘭牧騎-赤峰市 60 年圖志』 赤峰市文化新聞出版廣播局
紀蘭慰, 邱久榮編
- 1998 『中國少數民族舞蹈史』 中央民族大學出版社
劉增軍, 張仲仁編
- 2012 『翁牛特旗烏蘭牧騎志』 內蒙古文化出版社
內蒙古自治區文化廳編
- 1997 『烏蘭牧騎之路-紀念烏蘭牧騎建立四十周年 1957-1997』 內蒙古人民出版社
內蒙古自治區文化局編
- 1965 『烏蘭牧騎之歌』 音樂出版社出版
王慧琴, 刑野編
- 2018 『烏蘭牧騎精神』 方志出版社
王保士編譯
- 2000 『前蘇連文化藝術辭典』 長江文藝出版社
翁牛特旗志編委員會編
- 1993 『翁牛特旗志』 內蒙古人民出版社
烏國政編
- 2002 『芸苑輕騎』 內蒙古人民出版社
朱嘉庚, 吉日嘎拉編
- 2018 『烏蘭牧騎回想錄』 內蒙古人民出版社
中國民族民間舞蹈集成編集部
- 1994 『中國民族民間舞蹈集成・內蒙古卷』 中國 ISBN 中心出版

【モンゴル語】

Rinčin dorji, Dongrubjamsu, Ding shou pu

1979 *Mongyol arad-un mingyan dayuu* Öbör mongyol-un arad-un hebelei-un quriy-a(リンチン・ドルジ, ドンロブジャブ, 丁守璞編 1979 《蒙古民歌一千首》第一卷, 內蒙古人民出版社)

Ünen boyan

2007 *Mongjol Undesten-no arad-un dajuu* Öbör mongyol-un bagacod khuhed-un hebelei-un quriy-a(ウエン・ボヤン 2007 《蒙古族民歌》下, 內蒙古少年出版社)

【欧文】

Peter K. Marsh

2006 *Beyond the Soviet Houses of Culture: Rural Responses to Urban Cultural Policies in Contemporary Mongolia*. In Ole Bruun and Li Narangoa (eds.) *MONGOLS FROM COUNTRY TO CITY Floating Boundaries, Pastoralism and City Life in The Mongol lands* Nordic Institute of Asian Studies Studies in Asian Topics. No.34. Copenhagen : Nordic Institute of Asian Studies.

Performance works of Ulayan möčir Art Troupe in their Cultural Revolution and its recovery period - the case of the ongniüt banner in Chifeng City, Inner Mongolia, China-

T.Altanbagana

Summary

This paper elucidates the performances works of the *Ulayan möčir* Art Troupe (hereinafter referred to as *Ulayan möčir*) in the Inner Mongolia Autonomous Region. To this end, the author will firstly introduce the concept of *Ulayan möčir* . What is *Ulayan möčir* ? *Ulayan möčir* is a Mongolian word, *Ulayan* means red, *möčir* is a tree branch, and *Ulayan möčir* means "red branch." In Chinese language, it is called "Red Culture Working Team." Red symbolizes the communist revolution, while the cultural working team refers to an organization that carries out cultural activities. In other words, it aims to disseminate socialist ideology mainly to herdsmen and peasants in the Mongolian region through cultural and artistic activities such as singing, dancing, and opera. *Ulayan möčir* was founded in 1957 in the Inner Mongolia Autonomous Region. This paper analyses previous performances of Ulayan möčir focusing on the period of the Cultural Revolution and its recovery period.